

タイトル	講演2「ウクライナの木造教会堂建築 歴史的背景 及び構成上の特質 」
著者	ハターエヴァ, テチャーナ; KHATAEVA, Tetyana
引用	北海学園大学人文論集(75): 12-23
発行日	2023-08-31

講演2 「ウクライナの木造教会堂建築 — 歴史的背景及び構成上の特質 —」

ハターエヴァ・テチャーナ

○ハターエヴァ氏 はい、分かりました。

皆さん、改めまして、テチャーナ・ハターエヴァと申します。よろしく
お願いします。

本日、ウクライナの木造教会堂建築を紹介させていただきます。特に、
その歴史的な背景及び構成上の特質について見たいと思います。

歴史的な背景ですが、

先ほど、寺田先生がお話
の中で、非常に細かく分
かりやすく、ウクライナ
という国家の歴史につい
てご説明がありました。
今、ご覧いただいている
のは、主に木造教会堂建
築に関連のある重要な出
来事をピックアップした

988年	キエフ・ルーシ国家のキリスト教化
996年	十分の一税教会堂 完成
1011年	聖ソフィア大聖堂の建設着工
1240年	タタール軍の襲撃を受け、キエフ市陥落、多数の 木造教会堂が焼失、十分の一税教会堂破壊
1428年	現存最古の木造教会堂の建設
1654年	ペレヤースラウ会議 東部ウクライナはロシアの 支配下に、西部ウクライナはポーランドの支配下 に置かれる
1841年	「ロシア教会会議」は平面プランを定め、他のプラン の使用を禁止。建設済みの教会堂も改造される
1917年	10月革命、宗教迫害の時代が始まる
1991年	ソビエト崩壊、ウクライナの独立
2018年	ウクライナ正教会 設立

スライドです。もちろん、それは、全てというわけではなくて、そのほか
にも様々な歴史はありましたが、今日は時間のこともありますので、一番
大事な部分について簡単にご説明させていただきたいと思います。

まず一つ目に、988年、キエフ・ルーシ国家のキリスト教化についてで
す。国家として、ウクライナがキリスト教化された、非常に重要な出来事
です。キリスト教化以前の時代における宗教は、多神教でした。多数の神
様、雷の神様、森の神様がいて、ウクライナ人は、日本の神道に近い形で

多神教を信じていました。その当時の公のヴラデーミルは、自分の権力を支えるために、イデオロギーが重要だと考え、ビザンチン帝国（東ローマ帝国）からキリスト教を受け入れます。そのことは、非常に重要な政治的な判断でしたが、それについてお話しすると非常に話が長くなってしまいます。まず、10世紀末に、キエフ・ルーシ国家がキリスト教化されたということ覚えていただければと思います。

キリスト教化されると、当然、教会堂の建設が始まります。996年に完成した十分の一税教会は最古の教会として知られています。十分の一税教会堂は破壊され、現在、何も残されていない状態です。

次に紹介したいのは、聖ソフィア大聖堂です。キーウにある聖ソフィア大聖堂という教会堂は、1011年に建設着工されました。実はその建設開始の年について様々な説があります。つい最近までは1037年が主流の仮説でした。現在でも聖ソフィア大聖堂の建設をめぐる仮説はただの仮説であり、誰もが信頼できるような史料や年代記などは、ありません。研究者、歴史学者によって見方や解釈が異なりますが、長い間、1037年が主流でした。最近では1011年ではないかという説をサポートする専門家が非常に増えて、1011年説が採用される場合が多いです。2011年9月21日に、聖ソフィア大聖堂建設1000年記念祭という非常に大きなイベントがありました。

ここで重要なのは、十分の一税教会堂も聖ソフィア大聖堂も石造であり、木ではなくて、石とレンガを使った工法で建てられた教会堂であるということです。多神教からキリスト教に変わると、新しい宗教施設を建てる職人が必要です。そのために、ビザンチン帝国から職人たちがウクライナに来て教会堂を建ててくれるのですが、その職人たちが使い慣れていたのは、石とレンガでした。しかし、その当時、キエフ・ルーシの住宅建築は、基本全て木造で、現地ウクライナの大工や職人たちにとって最も使い慣れている材料は木だったので、後に、教会堂も木で建てられるようになります。

時代はどんどん進み、1240年にモンゴル・タタール軍の襲撃を受け、キーウ市が陥落します。陥落した時、キリスト教化から既に250年ぐらい時間

が経っているので、その間、多くの木造教会堂が建てられたと思われます。たくさんあったはずの木造教会堂ですが、モンゴル・タタール軍の襲撃によって多数の木造教会堂が消失してしまい、先ほどお話しした十分の一税教会堂も破壊されました。しかし、聖ソフィア教会堂は無事でした。現在、一番古いとされている木造教会堂は1428年のものです。

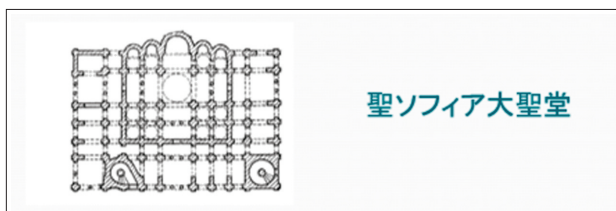
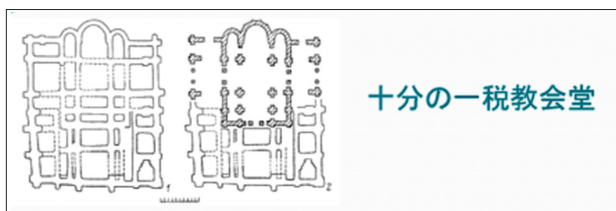
次に触れたいのは、1654年のペラヤースラウ（ペレヤスラフ）会議です。その会議の結果として、ヘトマン国家（ウクライナ・コサックの国家）がロシアの支配下に入りました。暫くの間、ロシアの支配下に置かれた地域には、自治権がありましたが、その後、併合され、完全にロシアに飲み込まれてしまい、ロシアの一部になってしまいました。同時に、西部ウクライナはポーランドの支配下に置かれたままになりました。ここは非常に大きな分岐点でした。ポーランド（カトリック国）及びロシア（正教国）の影響は、教会堂の様式や平面プランにまで及びました。その影響がどのような形で現れたかについて、後で説明しますが、まず、この年代を覚えていただければと思います。

次に注目したいのは、ロシア教会会議という会議が行われた1841年です。その会議で、教会堂を建てる際、適用すべき平面プランが決まりました。キリスト教化以降、1000年ぐらいの年月をかけ、形成されてきたウクライナ独自のスタイル、伝統的な平面プランの使用は禁止されました。さらに、既に建てられた教会堂は改造の対象になりました。

次に触れたいのは、1917年の十月革命以降に始まった宗教迫害の悲劇的な時代です。その時代は、1991年のソビエト崩壊まで続きました。そして、5年前の2018年にウクライナ正教会の設立という非常に大きな出来事が起こりました。この設立をもって、モスクワの東方正教（ロシア正教）から完全に独立したウクライナの正教会が誕生しました。

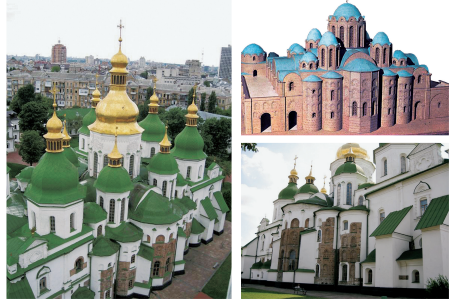
次ページにあるヴァスネツォフの二枚の絵ですが、この絵は、19世紀に、キーウ市内にあるウラジーミル大聖堂のフレスコ画になっております。右側は、ウラジーミル公の洗礼の様子です。左側は、キリスト教徒になったウラジーミル公がキーウに戻った後、彼の立ち合いのもと、キーウ市民が

洗礼を受ける様子です。この出来事を記念する日として、7月28日がウクライナでキリスト教化記念日となっております。右下の写真は、キーウ市内にある、ウラジーミル公が十字架を手に持っている銅像です。一般市民が洗礼を受けたとされているドニエプル川を見下ろす丘の上に立っています。

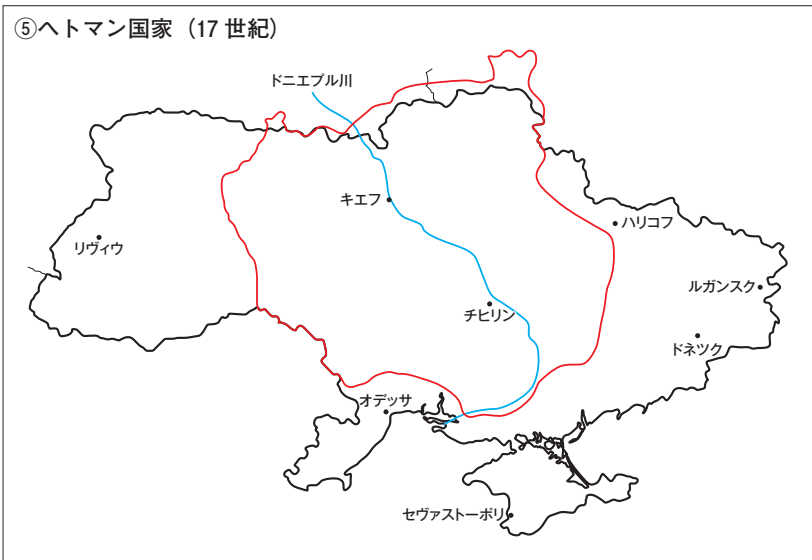


前ページの国は先ほどお話した十分の一税教会堂と聖ソフィア大聖堂の平面プランです。この様式はビザンチン様式と言います。ビザンチン帝国において主流だった建築様式です。先ほども説明したように、ビザンチン帝国から来た職人たちは、この様式で教会堂を建てることになりました。

聖ソフィア大聖堂を見ると、現在の形は、昔とは異なり、様々な装飾が施され、屋根の形状も変わっています。これは、18世紀にバロックというスタイルが人気になって、バロック風に改造されたのです。もともとの形は、右上の絵のような形でした。ビザンチン様式そのものです。



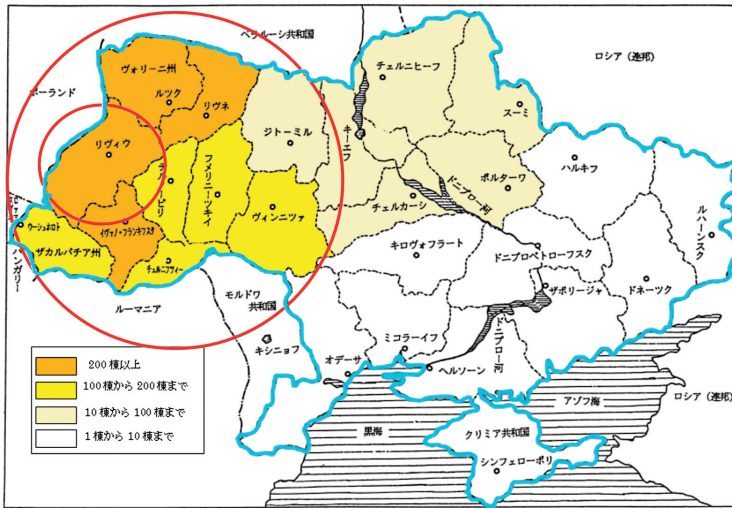
ここで、1654年のペラヤースラウ会議に戻りたいと思います。⑤の地図を見ていただくと分かりやすいと思います。



※赤い線で囲まれた部分がヘトマン国家 (17世紀) の地である。

ヘトマン国家（ウクライナ・コサックの国）は、ロシアの支配下に置かれることになりました。一方、左側にある西ウクライナ、例えば、ハリウチナー（中心都市はリヴィウ）などは、ポーランドの支配下に置かれたままになりました。この状況が木造教会堂の様式にどのような影響があったかということについて後ほど説明します。

では、ウクライナ全土に現存する木造教会堂の分布を見てください。その数は、2500棟です。実は、この2500という数はちょっと古いデータです。また、皆さん御存じのように、今、戦争中です。残念ながら、この数は少なくなっていくと思います。



この2500棟のうち1900棟は西部ウクライナにあります。大きい円で囲まれている地域は、西部ウクライナです。その中に、小さい円があります。それはリヴィウ州です。そのリヴィウ州だけでも815棟の木造教会堂があります。西部ウクライナに集中して現存している理由として、まず、西部ウクライナに位置するカルパティア山脈が木材豊富な地域であることが挙げられます。また、カトリックの影響で、教会堂の建設に非常に力を入れていました。さらに、様々な紛争から地理的に離れた地域だったということもあって、たくさんの木造教会堂が残りました。

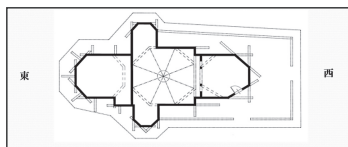
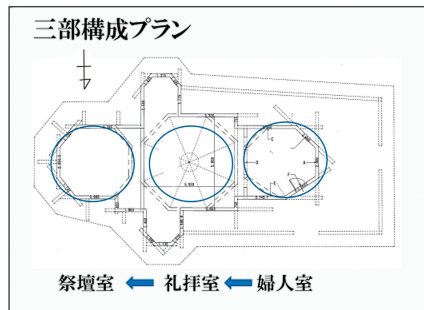
次に、ウクライナ木造教会堂の基本構成を紹介します。その構成には、三部構成プランと十字形プランという基本的な二つのプランがあります。

伝統的な木造教会堂の構法は、校倉造りです。校倉造りは、簡単に言うのと、ログハウスみたいなもので、木材を水平にして重ねていく構法です。その木材が交差している仕口の切り込みによって、木がしっかりと組み上げられていきます。

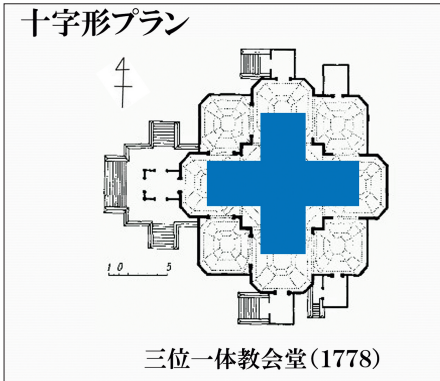
校倉が教会堂の構成の単位になって、その三つが一行に並ぶのは、三部構成プラン(下図)です。入口のドアが西側にあります。三つの青い丸で囲まれているのはそれぞれの単位(部屋)になっており、それぞれに名前がついています。その入口の部屋は婦人室、真ん中の部屋は礼拝室、一番東側にあるのは祭壇室です。祭壇室は祭壇が置かれている部屋で、真ん中の礼拝室と祭壇室との間に壁があります。イコノスタシスがその壁にあって、礼拝室で礼拝が行われます。婦人室は、玄関間みたいな部屋です。昔、女性と男性が別の部屋で礼拝に参加することになっていて、婦人室は女性のための部屋でした。さらに、まだ洗礼を受けていない人は、この婦人室に集まって、礼拝を聞いていました。

外観の写真を見ていただきます。これは、リヴィウ州のドロゴビチ市にある聖ユーリイ教会堂です。三部構成プランであり、外観からそれぞれの部屋の位置が確認できます。

次に、二つ目の十字形プランです。形を見ると十字になっています。校倉の数は少なくとも五つ以上です。三位一体教会堂は、唯一、九つの部分からできてい



ます。この教会堂は現存しており、内部から塔の中の様子も見ることができます。ウクライナの木造教会堂の特徴の一つは、内部が繋がった空間になっていることです。




この繋がった空間は、「ザロム」という工法により作られています。ザロムとは、階層ピラミッド状の多層式塔を造るときに、ピラミッド状に段差を造っていきやり方です。ザロムの機能の一つは、開放的な内部空間を作ることです。先ほど、三位一体教会堂を御覧になったのですが、その繋がっている内部空間が非常に特徴的です。



ザロム

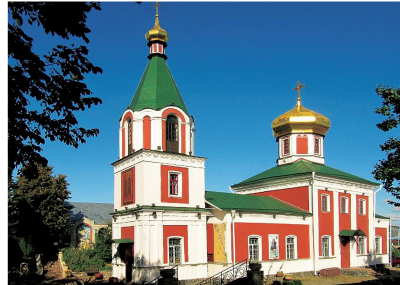
ザロムの機能

- 開放的な内部空間を作る → 
 - 教会堂の建物を被害から守る
- ↓
- 2011年の調査:
積雪量・雨量が多い地域では、屋根にかかる力を分散するために、ザロムの施工法が多く採用されている。

木造教会堂と言えば、特にロシアを研究していらっしゃる皆さんは、カレリアにあるキジ島の教会をすぐに思い浮かぶと思います。その外観はウ

クライナの教会堂に似ているかもしれませんが、中に入ったら、低い天井があって、塔の中の様子を見ることはできません。このザロムはウクライナの木造教会堂にしか見られないような工法です。

また歴史の話に戻りますが、1841年のロシア教会会議では、ロシア様式という教会堂のスタイルが決まり、それ以外のスタイルで教会堂を建ててはいけないという会議決議がありました。右の教会堂が、まさに、そのロシア様式で造られた教会堂です。形が非常にシンプルなロシア様式は、婦人室の上に必ず鐘楼（鐘塔とも言う）があり、礼拝室の上に塔が一つだけあることが特徴的です。一方、ウクライナの伝統的なスタイルは全く違います。



下はウクライナ独自のスタイルで、どんどん上に伸びていくような姿がウクライナの木造教会堂の特徴です。



内部の空間が上に伸びていくような構成は、17世紀後半から18世紀後半まで主流だったウクライナ・バロック様式の特徴でもあります。聖ソフィア大聖堂の今の姿は、ウクライナ・バロック様式によるものです。そ

の特徴としては、塔の形状の多様化、庇や回廊の設置とそれらの装飾が挙げられます。ヨーロッパ・バロックに比べると、ウクライナ・バロックの装飾はちょっと控え目です。

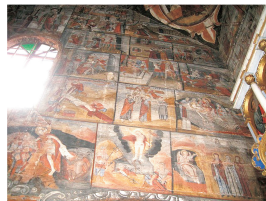
先ほど、聖ユーリイ教会堂の外観を見ていただいたのですが、その細部を見ていくと、ウクライナ・バロックの特徴的な細かい装飾を見ることができます。

ウクライナの木造教会堂建築は、ヨーロッパの木造教会堂建築にも見られる要素があります。校倉造りの教会堂はウクライナ以外に、ロシア、フィンランド、スウェーデン、ノルウェーなどの国にもあります。また、くぎを使わない建築法もウクライナ独自の工法ではありません。しかし、「ザロム」という塔の工法はウクライナの木造教会堂のみに見いだされる特徴です。

皆さん、恐らく、内部の様子も気になるかと思いますが、最後に、聖ユーリイ教会堂の内部をお見せしたいと思います。この聖ユーリイ教会堂は、内部空間にある木製の壁の上に壁画が施されているとても素敵な教会堂です。隙がなく、下から上まで、きれいな壁画が良い状態で残されています。



「アカティスト賛歌」
図像サイクル



「キリストの受難」
図像サイクル



「キリストへの賛歌」
図像サイクル



「最後の審判」図像 1



「最後の審判」図像 2



「使徒の殉教」

ウクライナの木造教会堂建築の歴史的で質的な価値が認められて、2013年、右記の8棟の木造教会堂がユネスコの世界遺産に登録されました。聖ユーリイ教会堂もその一つです。



興味があれば、ユネスコのホームページをご覧ください。

御清聴ありがとうございました。

○司会 はい。ありがとうございます。

時間が限られますけれども、質問があれば承ります。

○質問者 興味深いお話をどうもありがとうございました。

ロシア国内では、教会の中に石造りの教会と木造の教会が同じ教会内で建っている場合があります。ウクライナではいかがでしょうか。

石造りの場合には、冬、寒くて、とてもじゃないけれども祈祷をすることができないので、冬は木造教会でお祈りをささげると聞いたことがあります。

ウクライナでは、石造りの教会と、それから、木造の教会が、同じ敷地の中に建っている例はありますか。

○ハターエヴァ氏 皆さん、ごめんなさい。(ZOOMの不調で)聞こえな

いです。

○**質問者** 後ほどご回答ください。

○**司会** すみません。ハターエヴァ先生には、後ほどご回答いただきます。

[講演終了後、ハターエヴァ先生からメールにて下記のようなご回答があり、質問者の方にメールでお伝えした。機器の設定の不備により、ハウリングが発生してしまった。会場の聴衆の皆さん、ハターエヴァ先生、質問者の方にはご迷惑をおかけした。今後は機器の設定に最善を尽くしたい。]

○**ハターエヴァ氏** 確かにウクライナにも夏の教会と冬の教会を作って、季節によって使い分ける場合があります。しかし、夏の教会は木造で、冬の教会は石造という決まりがなくて、どちらも木造で、大きさだけが違う場合が多いです。2枚の画像を添付いたしますが、どちらも木造で、同じ敷地内にある夏教会と冬教会です。

